

茶の湯文化学会会報 No.82

第82号 / 2014年10月9日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科 学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「千少庵シンポジウム」に参加して

八尾 嘉男

今年度最初の茶の湯文化学会近畿例会は、ゴールデンウィークの最終日、五月六日に活気ある同志社大学今出川キャンパスで行なわれました。その日のテーマは、いつもの近畿例会の個別報告二本と趣を異にし、昨年、数えで没後四〇〇年を迎えた千少庵にまつわるシンポジウム、と大変興味深い内容で、普段の例会より出席者が多いなか始まりました。

報告者は、昨年、年忌に際して特別展を開催した表千家と裏千家から原田茂弘、山田哲也の両氏です。報告の内容は学会誌『茶の湯文化学』で公表される予定とうかがっていますので、ここでは簡単に両氏の概要を見ていきたいと思います。

最初の報告者、山田哲也氏は「千少庵の生涯について」という題目のもと、出自、千家とのかかわり、「千家」再興、帰洛後の少庵、交遊関係、茶室、茶道具、茶会記と史料を見ていくことで話を展開していきます。

「千家とのかかわり」は、母・宗恩の再婚から天正八年（一五八〇）、少庵の堺から京都への移住、茶会記への登場に話題が及びました。少庵の京都転居にいたる背景を、山田氏は利休と長男・紹安（道安）の不同を示しつつ、疑問を呈します。氏は続けて、元龜

二年（一五七二）正月から天正九年まで紹安が茶会記に登場しないことに触れていきました。そして、少庵の茶会記初出（『天王寺屋会記』・天正六年）が紹安から十二年も遅くなることを確認していきます。

それを受けて、山田氏は「千家とのかかわり」を貫く問題点、『天王寺屋会記』に出てこないこと一点に依拠して判断することへの危うさへ伺います。これは私も全く同感で、特に後者の茶会記初出に時を要したことは、天王寺屋と面識をえる機会が宗易（利休）の子となるまで訪れていなかったことに理由を求め

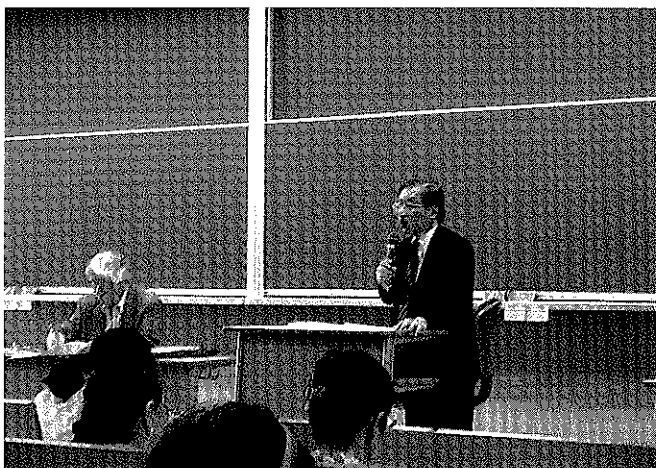
べきと感じます。そもそも、織田信長の茶頭筆頭で道具持ちの天王寺屋が全くの素人と呼ぶことは当然なかつたでしょう。仮にあつたとしても、お招きに預かる少庵の側で見ますと、一夜漬けのハウツーを頭に入れば茶会で粗相なく振る舞えるとはいきません。繰り返しになりますが、ましてや招いたのは先に触れた信長の茶頭筆頭という立場以前に、地域の名士でもあります。史料的な制約から時期が遅れただけで、少庵は天正六年までにある程度以上、茶の湯の修練をしていたものと判断した方が自然な話でしょう。

ついで、山田氏は近年、中村修也氏の報告などもあ

り、関心が寄せられることの多い利休切腹の地へと目を配っていきます。従来、利休は京都で切腹したと考えられていますが、実は堺であった可能性に目を向けることは興味深い話でした。レジュメがふんだんな分量であったため、時間の関係上、途中からは駆け足でしたが、近年、多彩であったことが明らかにようになってきている少庵の交友関係は、交友範囲の広さに改めて驚きつつも、関係の疎密、帰洛後、少庵は茶家としての歩みを始める京都の町衆であったことを踏まえる必要性を感じました。

つづく、原田茂弘氏の報告は、昨年「千家二代 少庵ゆかりの茶道具展」(表千家北山会館)に出陳された消息を中心に、新出史料を見ていくことで、「一、少庵の屋敷について」「二、少庵と道安の交流」「三、少庵の家族 孫の馬助のこと」「四、少庵の年忌」と話が進行していきました。

「一、少庵の屋敷について」は、天正十三年頃以降と推測される「富左(富田左近将監 一白)」宛の少庵消息(半床庵文化財団蔵)で肝入りの存在を確認し、屋敷地の変遷を追っていきました。屋敷地については、原田



山田哲也氏の発表

氏の報告後のディスカッションでも中村利則氏から質問が出されましたが、天正九年四月一日、平野(末吉)勘兵衛宛の千宗易(利休)書状で確認できる利休の大徳寺門前入りは、敷地内に利休屋敷と少庵屋敷があったこと。少庵が二条釜座に屋敷を構え、誓願寺通りに面して屋敷を構えていた時期があったこと、他にも屋敷があった可能性などに話が及びました。

て、なるほど確かにこのことが谷端昭夫氏から

出されました。それは少庵が、同時代史料の茶会記(『天王寺屋会記』)に、初出の段階ですでに庵号の「少庵」を名乗っている点に注目すべきであることです。そして、「宗淳」の名ももらっています。これは、では授けたのは誰になるのか、なぜ宗淳ではなく、少庵で記録されるのかと、従来、見過ごされていた疑問点が導きだされるもので、私にとって

は目から鱗の思いでした。

さらにディスカッションは、谷端昭夫氏から、これまで少庵の消息とされてきたものの真贋の特定が今後、必要になる作業であること。矢野環氏から天正十五年の北野大茶湯関係で少庵の書状があることなどが指摘され、限られた時間のなか、出席者にとって大きなお土産となる議論がなされ、実りあるなか幕を閉じました。今後も、別のテーマでこういったシンポジウムが設定されることが期待されます。

私個人の関心とメモに任せた拙い参加記となりました。いたらない点のご容赦を乞うばかりですが、会誌上での掲載が省かれるディスカッションの内容が少しでも伝わり、わずかでも充実した場であった雰囲気を感じて頂ければ幸いです。



「千利休作、『登亀花生』について」

米村 孝一

先日、古書店で、「茶窓閑話」と題する、

「二、少庵と道安の交流」は、近年、不仲説に対する否定的な見方があるなか、そのあと押しをする「五月雨」の和歌入りの消息で、私にとって意を強くさせるものでした。そして、「三、少庵の家族、孫の馬助のこと」は表千家六世・覚々斎の記録にも登場する馬助、閑翁宗拙にまつわる内容で、閑翁宗拙が好物の「とくうり(早瓜)」をあまり食べすぎないように気を配るなど興味深いことが紹介されました。

また、参考として紹介された「少庵消息 そうけい・宗旦・ねい(宗旦の妹)宛 年未詳七月八日付 旅路の文」は、細川三斎を訪ねて豊前国小倉まで赴いた際のもので、「淡交」昭和四十四年(一九六九)七月号で永高福太郎氏が紹介したものを久しぶりに取り上げたとのことでした。この消息は、その内容の意義深さに注目するとともに、これまで多くの流儀誌が長い歴史と蓄積を重ねているなか、その築かれた財産に目を配ることの必要性を改めて感じました。

休憩をはさんで、熊倉功夫会長の司会のもと進行されたディスカッションは、屋敷地に関わる中村利則氏の質問のほか、質問を聞いて

和綴じ本をみつけました。この本は享和四年、近松茂矩が茶の湯に関する故事をあつめ、一冊の本として出版したものです。同書の巻頭には、

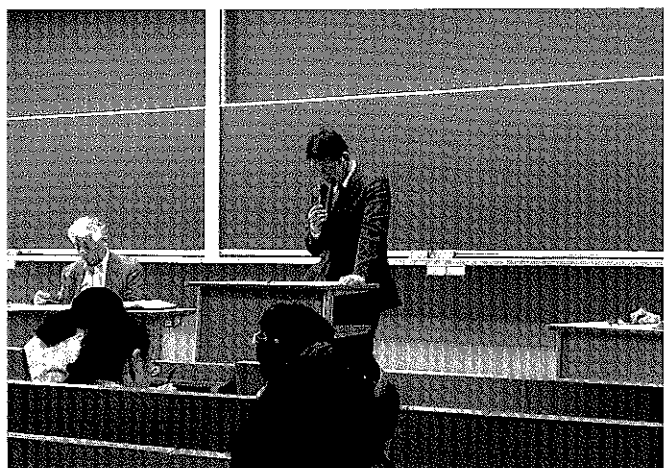
上は王公、下は世の中を避け隠れ住んでい
る人にいたるまで、困難に直面したとして
も、茶の道が含みもつ

徳をもつて、その困難にくじけること
のないよう、心を込めて茶の道の故事を輯め、
この書を著した。

と、この本を出版した理由が記されています。

同書には、園城寺の竹の器にまつわる話、松永久秀が所持していた平蜘蛛の釜に関する話など、茶の道に関する逸話が数多く収録されていました。中でも、織田信長が正親町天皇へ茶の湯の道具を献上したときの目録が載せられていることに気付いたときは、我が目を疑うほど驚きました。そこには私蔵の花書が「登亀の花生」として今に伝えていた、二重切の竹の器の由来が記されていたからです。ここに、その目録を載せておきます。

○元龜年中(一五七〇～一五七二)、正親町上皇は、茶道具一式を献上するよう、織田



原田茂弘氏の発表

信長に勅を下された。その勅を受けて信長は、千利休に茶道具を献上しよう申し付けた。そこで利休は、茶の湯の道具を一通り揃えて献上した。そのとき献上された品々は、次のようなものであった。

- 一、御茶人は、大小の棗二つ。棗は黒の漆で塗られ、大きい方の棗の蓋には陽の菊の花、小さい棗の蓋には桐の葉が、金粉の蒔絵で描かれていた。
- 一、御茶杓は、象牙作りであった。
- 一、水壺は、杉で作った曲げ物であった。
- 一、香合は、蛤の殻を、内外ともに金泥で塗り、甲の上には胡粉で白い大菊が描かれていた。
- 一、炭取りは、檜の剥目の木地を用い、ふち高に作られていて、炭取の外側には大輪の菊の花が、極彩色で描かれていた。
- 一、花入は、竹製の二重切。竹の切り口だけでなく、内側も底も、すべてを残すことなく黒の漆で塗られ、金粉で青海波の蒔絵が上下共に描かれていた。

史書は、「織田信長は永祿十一年(一五六八)、

足利義昭を奉じて上洛した。また元龜元年(一五七〇)、荒れ果てた内裏の修理をした」等を伝えていました。そのような事跡を考えた場合、正親町天皇が、信長に茶の湯の道具一式を献上しよう勅を出しになったのは、信長が内裏の修理に着手したころであったかと思われまします。そこで信長は千利休に命じ、茶の湯の道具を作らせて献上しました。そのとき献上された茶の湯の道具の目録が『茶窓閑話』に収められていたのです。

著者の茂矩は、この献上目録をどのようにして入手したのか、その経緯を記していません。そのために、この目録が、真筆を本に写し取ったという確証はありません。だが、同書が収録している他の逸話などからみて、おそらく間違いのないことだと思います。そのように結論付ける理由として、金粉で青海波を描いた竹製の花器を用いて抛入花を生けた作品が、私蔵の『本朝瓶史・抛入岸之波』だけでなく、他の花書にても伝えられているからです。

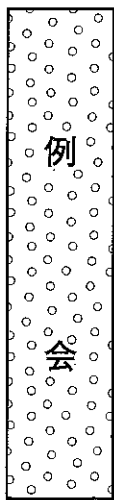
『抛入岸之波』は、江戸時代中期の寛延三年(一七五〇)、釣雪野叟が出版した木版刷りの花書です。同書には竹で作った花器に草花を生けた、抛入花の作品を数多く載せ

ていました。その中に、竹の内側を漆で塗り、その上に金粉で青海波を描いた二重切の竹の器も載せられていました。その絵図をよくみると、竹の器の上段の生け口には、さらに亀の絵が金粉で描かれていました。そのために「登亀花生」と呼ばれていたことを、合わせて伝えていました。その竹の器こそ、織田信長が利休に命じて作らせ、正親町天皇に献上した、竹の花入であったに違いありません。因みに、この竹の花入は明和五年(一七六八)に出版された、『插花・千筋の麓』と題する花書にも伝えられていました。

ところで、平成二五年に小学館が発行した『日本美術全集』は、千利休に関する年表を付けています。その年表は「永祿五年(一五六二)に茶会を催す、掛け物のはじめ。永祿十一年、信長入京。天正二年(一五七四)相国寺で信長は茶会を催し、正倉院の宝物である蘭奢待を利休へ与えた」等を記していました。この年表は最も新しいものであるにもかかわらず、永祿五年から天正二年までの利休の事跡を空白のまま、としています。『茶窓閑話』が伝えている記述は、その空白の事跡を埋めるものとして注目に値するものだと思います。

参考文献

- 本朝瓶史・抛入岸之波 寛延三年(一七五〇)刊
茶窓閑話 享和四年(一八〇四)刊
插花・千筋の麓 明和五年(一七六八)刊
日本美術全集 平成二五年(二〇一三)刊



東京例会

(平成二五年十一月十六日)

「羽箒について三―鳥種と茶人の好み―」

下坂 玉起

放射性炭素年代測定(生き物文化誌学会とくら基金の助成。パレオ・ラボ測定)により、遠州蔵帳とされる青鸞羽箒の羽は一六四六―一八〇〇年のもの、古い野雁羽箒の羽は七三・一%江戸時代のものと判明した。江戸時代の羽箒の現存を初めて科学的に証明した。

羽箒の鳥種の集計の結果(調査した七〇五本の内五三七本のみ同定)、①ノガン 八十五本 ②セイラン 六十三 ③マナヅル 四十九 ④コウノトリ 三十五 ⑤イヌワシ 二十六 ⑥ツル類? 二十六 ⑦トキ 二十三 ⑧タンチョウ 二十二 ⑨インドクジャク 十七 ⑩ハクチョウ 十七で、昔は鶴とされていたコウノトリも鶴に含めると鶴類が最多となる。外国種が多いのは、江戸時代珍重されていた外国種が入手容易になって多数作られ、それが現存しているからだろう。

野雁羽箒は江戸時代から鶴の近縁種のノガンで雁ではなかったことは、実測調査結果と、江戸中期の『茶湯評林』の野雁羽箒の「とらふ 本白 一文字 式ふ」がノガンの羽特有の模様で雁にはないことから明らかである。

初公開された細川三斎自作・雁一ツ羽(永青文庫蔵)は、マガンの右最外風切羽で、曲がったままの羽柄に竹皮を直に巻く。三ツ羽以前の素朴な結び方で、最古級の羽箒である。

羽箒を手を持つ茶人像は、金沢の金森宗和像(谷見氏の研究による)の他に、利休像(千宗且自画賛、安田鞞彦旧蔵)、利休像(千宗且賛、個人蔵)、松尾宗二像(松尾流蔵)、茶の湯人形(香山園蔵)がみつかった。羽箒

は茶人を象徴する儀礼道具だった可能性がある。

(平成二六年五月二十四日)

「北野大茶湯再考―天正十五年の茶の湯―」

中村 修也

天正十五年十月一日のイベント茶会・北野大茶湯は、秀吉の思惑にもかかわらず、十日間の予定を一日に短縮するほどの失敗に終わった理由を次の四つの点に求めた。第一に京都での茶会を堺茶人が仕切ったこと。第二に北野大茶湯が秀吉蒐集の名物道具の展覧にあったこと。第三にイベントが参加型であったこと。第四に秀吉の評価対象が茶屋囲いの奇抜さだけにあったこと、にあると考える。

当時の堺茶人の京都茶人への対抗意識は強く、この北野大茶湯でもそれが前面に出ており、京都茶人を鼻白ませた。また秀吉主催であれば経済的には痛まないが、参加型だと小屋掛けから道具の用意やらで費用がかかる。これは公家にとっては苦しい条件であった。そして、まだ精神の「癒し」を主とする茶の湯において、道具中心、趣向主義の茶の湯はなじまなかった。天正期の『天王寺屋会記』を分析しても、茶会の参加者は二人から三人

の少人数で、大寄せ的な大茶会は「癒し」の茶からは逸脱しており、ましてお金もかかるとなると参加者は少なくても当然であった。

他方、『兼見卿記』によると、吉田兼見は「釜一取之代式百疋、宗易形ヲ出シ」(九月十二日)、大茶湯終了後、「早天宗易息紹安へ為礼百疋持参」(十月二日)しており、利休から道具などの指導を受けた謝礼金を払っている。つまり、利休はこの大茶湯で、公家への茶の湯指南、道具斡旋という商売を行っていた。おそらく宗及や宗久も同様だったであろう。商売を基調とした堺の茶の湯が、京都の茶人達には受け入れなかったということであろう。

例会のご案内

東京例会

十一月二十二日(土)午後二時

(会場：東洋英和女学院)

「五島美術館特別展『存星―漆芸の彩り―』によせて」

福島修氏

三宅秀和氏

席主：四名
会費：五千円

※参加希望者は予め連絡をして下さい。
※例会の各案内のなかには、「未定」「予定」となっているものもありますが、その内容が決まり次第、茶の湯文化学会ホームページを更新して、会員のみなさまにお知らせしております。最新の情報につきましては、ホームページの方でご確認ください。



新刊紹介

*『講座 日本茶の湯全史』全三巻

茶の湯文化学会編 思文閣出版

(定価 各巻二五〇〇円+税)

茶の湯文化学会創立二十周年記念出版の書。このたび第二巻が出版され、これで全巻揃ったことになる。

近年、茶の湯の歴史研究は、著しい展開とともに、テーマは多岐にわたり詳細をきわめている。本講座は、日本文化史の中に位

一月二十四日(土)午後二時

(会場：東洋英和女学院)

「未定」

西田宏子氏

「秋季展「大名茶人松平不味の教寄」『雲州蔵帳』の名茶器」によせて」(仮)

水田至摩子氏

静岡例会

十月二十五日(土)午後一時半～四時

(会場：静岡産業大学情報学部ウイステリアホール)

シンポジウム「オールアバウトティーとオールアバウトコーヒー、ユーカーズと日本」

補正暢氏

会場：静岡県藤枝市駿河台四―一―

(☎〇五四―六四五―〇一九二)

参加料：千円

東海例会

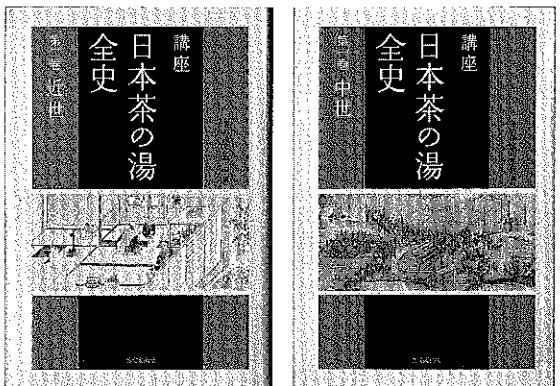
十一月十五日(土)午後二時

(会場：名古屋文化短期大学)

「近世前期における武家の茶の湯の諸相」

八尾嘉男氏

置つけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあけて俯瞰する。時代を輪切りにしながら見る本編と、茶の湯の重要な要素を通史として見渡す特論からなりたち、さらに各巻には時代別の概説と研究の手引き、参考文献を掲げ、研究課題を提示することで、初学者にはもちろん、さらに深く茶の湯研究を志す人にとつてのハンドブック的な要素ももたせる。最新の研究成果を踏まえ茶の湯を通覧する、まったく新しい概説書。



近畿例会

十月十一日(土)午後二時

(会場：同志社大学/良心館二〇二教室)

「名物記で見る、天目と茶碗」 矢野環氏

「用法から考える『天目』天目は、茶の湯でどのように理解されていたのか？」

岩田澄子氏

十一月十五日(土)午後二時

(会場：同志社大学/予定)

「茶業の縦糸」 寺田孝重氏

「室町時代御成における喫茶文化について」

橋本素子氏

十二月十三日(土)午後二時

(会場：同志社大学/予定)

「近世後期に於ける地方茶道の門人上洛―岡山を中心に―」 井上秀二氏

「茶道古典全集本」紹陽、宗作茶書について」

山田哲也氏

「茶道古典全集本」紹陽、宗作茶書について」

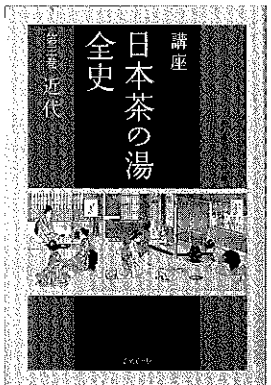
高知例会

十二月七日(日)午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表 「茶の本」岡倉覚三著 岩波文庫

正午～午後四時 茶事



各巻の詳しい内容については茶の湯文化学会のホームページをご参照ください。茶の湯文化学会会員には優待価格が設定されています。これについての詳細も、学会ホームページをご覧ください。

*『京の茶道具作家名鑑』

京都在住の茶道具を主に制作する作家三十八名を紹介した書。

淡交社編集局編 淡交社

(定価一六〇〇円+税)

*『西鶴の文芸と茶の湯』

西鶴の文芸作品にいか茶の湯文化が反映されていたかを解き明かした書。

石塚修著 思文閣出版社

(定価六〇〇円+税)

*『庭訓往来 影印と研究』(新典社研究叢書

二五六)

影印編、索引編、研究編からなる書。

高橋忠彦・高橋久子編著 新興社

(定価一八四〇〇円+税)

*『山田宗編 「侘び数寄の利休流」

「不審庵」「今日庵」の庵号を継承した宗旦の愛弟子の生涯の書。

矢部良明編 宮帯出版社

(定価三三二〇〇円+税)

*『采西『喫茶養生記』の研究』

日中八名の研究者による『喫茶養生記』の最新の論考。(翻刻付き)

熊倉功夫・姚国坤編 宮帯出版社

(定価三五〇〇円+税)

*『原三溪 偉大な茶人の知られざる真相』

大正から昭和初期にかけて独自の茶を展開した三溪の、茶人としての足跡を追った書。

齋藤清著 淡交社 (定価三八〇〇円+税)

*『世外井上馨 ―近代数寄者の魁―』

茶席に密教美術を持ち込み、新たな数寄世界を創出した井上馨の茶の湯とは。

鈴木皓詞著 宮帯出版社

(定価一八〇〇円+税)

開館紹介

*「古田織部美術館」開館のお知らせ

古田織部四百年遠忌にあたる今年四月、京

都鷹峰の地に古田織部美術館が開館されました。

京都市北区大宮釈迦谷十一三七

TEL・〇七五―四九一―〇六六六

*年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みください。すようよろしくお願いたします。

